

「アララギの人々」

『麦青きふるさと』 矢島祐利

高橋慶子

「新アララギ」二〇一三年五月号

二〇〇三年初夏のころ、いただいたばかりの矢島祐利『麦青きふるさと』を宮地先生のご覧に
いれた。先生は丁寧な頁を繰り、しばらく言葉を探している様子だったが、「科学者としての矢島
先生をよく存じ上げないが、歌をなされたら大成されたでしょう」と言われた。ファラデーの『ロ
ウソクの科学』の訳者矢島祐利（一九〇三～一九九五、敬称略）は、栃木県に生まれ、東大物理学
科卒業、京城帝国大学教授、引揚げ後のGHQ勤務を経て、東京理科大学の創設に関わった。国際
科学史アカデミー会員であった。学生時代より赤彦に師事していた。歌集名は「下つ毛は吾のふる
さと麦青く雲雀あがれる頃かも今は」による。ふる里の出流原（いずるはら）小学校に、塚原七郎
校長をしばしば訪ねていた。塚原は俳人でもあった。たまたま出会ったうら若い教師は、藤枝那美
（本名石井せゐ）のペンネームでアララギに投稿していた。

小川のせせらぎの音もきこえつつ行手に紅き山つつじの花

カシ若葉櫨の若葉の間よりすかしてみゆる萱家いくむね

一日のつとめ終りてかへるさの麦畑道にならすくさぶえ

若葉、せせらぎの音、大正十三年頃の田園風景である。やさしく児童に語りかける先生を思い浮
かべる。いじめ対策におられる今の教師とは何たる隔たりだろう。石井せゐは東京浅草の生まれで、
関東大震災後に親類を頼って栃木県に疎開していたのであったが、まもなく母校浅草小学校に転任

した。物理学徒とうら若い教師に、アララギ同士のつき合いを勧めたのは塚原校長だった。

夜おそく林檎を買ひて来りけるをとめをわれはしみじみと見つ

もらひける水仙の花を瓶にさすいとまごころに夜ぞ更けたる

恋心を林檎に秘めて訪ねてきたうら若い教師に物理学徒は言葉なく「しみじみと」まなざしを送っている、しっとりした相聞である。「夜おそく」の場面設定が効果的である。石井せゐは、言葉少なく希望を語る青年は家庭をつくった後も、嫁を労働力とはせず人間として大切にするだろうと判断して、二人は結婚に踏み切った。一女三男に恵まれたが長女は六歳にして永別、若い父母の悲しみは永く癒えることがなかった。

夢さめて今居し子ろが見えざればその名呼ばふとする夜半のあり

生ひ立ちて別れて行かむ時さへやかかる思ひの少しあるべし

短かけれどなれが一と世のすがすがと過ぎにしみればさちと思はむ

たたかひにいのち死にたるつはものもわがをさなごも安らかにいませ

二首目、花嫁の父の哀感であるが、現し身ならぬ花嫁の、婚礼の日の父の気持ちを想像しており、胸を打たれる。四首目、出征兵士を悼む歌は、上海事件、満州国建国宣言など、軍国主義の進行する時代を反映して、亡きわが子を思いまた出征兵士にも思いを馳せる、そんな時代であった。

逝きし子の忌日近づく梅雨ぐもり心重たき時は巡り来

おもかげは十とせの今も軽々と膝に抱きし六歳にして

おとめさぶる十代までも生きなかつた長女を悼み、「軽々と膝に抱きし六歳」の具体が痛切である。

あかつきの床のなかにて眼をつむりしましこころをおちつけにけり

御写真つねの姿にいませどもいまはすべなし香たきまつる

たまさかに真昼湯浴めるしづごころ亡き先生を憶ひるにけり

一九四一年に設立した京城帝国大学に赴任する日、夫妻は茂吉の自宅に挨拶に行った。茂吉は「矢

島君が教授になられて寺田寅彦先生が喜んでおいででしょう」と、自分の自動車で東京駅まで見送った。ヨーロッパ留学を約束されての京城赴任だったが、日米開戦により無期延期、四十五年終戦の冬、持てるだけの手荷物を持って引揚げた。

ふるさとの母がたびたる栗餅をともしみ喰らふ吾と妻子と

西風の吹きすさぶ夜を老いし母と雑炊を食ふ幾年ぶりぞ

つつがなく帰り来しかば老い母は吾の背中を洗ひたまへり

京城に置いて来にける本のこと思ふもあはれ夜半に目覚めて

引き揚げの吾の願ひは多からず机を置かむ一坪の場所

一家五人栃木県の実家にひとまずは落ち着いたが、子どもたちの教育と勤めのため東京に出て、三年間に六回も引越した。天井までの書棚と大きな机が学者のイメージだが、京城に残してきた一万冊余りの蔵書（多くは学生が貰っていった）を思い、わずか一坪の場所を願った学者の苦衷を察するに胸が痛む。

話が前後したが、矢島一家はしばらく我が家の近くに仮住まいしていた。矢島夫人も私の母も友の会（ミセス羽仁創立）員であったから、家族ぐるみのおつきあいが始まったのである。銭湯の脱衣場から衣服が盗られてしまう時代、我が家の風呂を使っていた。入浴を待つ間、六畳間の切りごたつをかこんで四方山話が楽しかった。私事にわたるが、父は在外公館に単身赴任して消息不明だった。中学生だった姉と私に、「矢島小父さん」は映画と食事のクリスマスを楽しませてくたさったり、古本屋に並んで『言苑』を買ってくたさったこともある。夫人も包容力のある方で、留守家族にとっては、まことに有難い友情だった。

此の日ごろ時間を売りに勤むると吾が言ひしとき友笑ひにき

ほかほかとステイム通る部屋にゐて心足れりといふにはあらず

外国の言葉ひびくを気にもせず吾の席にてほしいままにあり

五味保義君

G H Q 勤務

買ひし本貰ひし本のやうやくに二メートルばかりになりたり
子供らはオーケーなどと直ぐに言ふ此の移り行きも見過し難し

「オーケー」の歌、昭和二十三年作。宮地先生の歌「今世紀の終らむ頃の日本語を憂ふと言ふも愚かなるべし」は平成二十一年、六十一年後である。下の句「此の移り行きも見過し難し」はするどい。

昭和二十六年日本代表としてオランダの学会に出席、この時のスーツは夫人の手作りのもの、当時は南廻りだった。

バルコンに吹き入る風の涼しくてマニラの朝に果汁をたたふ
飛行機の中にねむりて目さむればシリアの国に朝の日射せり
アルプスもしまらくにして過ぎしかば緑傾くスウイスの草原

山を過ぎて高度下がれば草原に遊ぶ畜群の動くさへ見ゆ
長崎に三たび来たりて今日は見る原爆のちに栄ゆるさまを

オリンピックはショーかサーカスカわれ知らずアテナイ人は何と見るらむ
いにしへにオリンピックアの野を走りしは金のメダルのためにはあらず
夢にだに忘れぬ人もあらずいまはの際に誰が名呼ぶらむ

偶感

せい子夫人は日本子どもを守る会副会長、障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会会長。ヘレンケラー賞受賞。民俗学者柳田国男に師事、「指ぬき考」を著した。『くらしの歳時記』著。夫人の社会的活動を支えたのは祐利である。アララギ昭和二十二年十月号に「石原純先生」、二十三年二月号に「ラザフォードと原子核の創始」掲載。なお、寺田寅彦の弟子として、『寺田寅彦全集』（岩波書店）の編集に協力した。この稿は次男敬二氏のうずら文庫、その他を参照した。お礼申し上げる。

五月号「アララギの人々」補遺

高橋慶子

「新アララギ」二〇一三年七月号

アララギ歌人の矢島祐利氏が、東京理科大学（新宿区神楽坂）創設に関ったことを書いたが、二部の学生に大学で行っていた東京理科大神楽坂短歌会を書き忘れた。ご遺族より頂いた「しぶき」第二号より、一九五二年十一月歌会での矢島先生の寸評をお伝えする。

手厳しい自然という言葉ひと我が胸に迫りぬ茂吉の文章 仮名遣い資料のまま

これはまあこれで良いだろう。こういう風に実際の衝動に基づいて作る事が大切だ。

停電してたそがれ深き分析室にバーナーの光ほの青く燃ゆ

「たそがれ」とは君、夕暮れ時とでも言うような、一定の時間につけた名前だよ。たそがれが「深い」では意味をなさない。然し、実際に即している光景は一応出ている。

二千年前という朽ちにし「けた」に手を解れぬ冷たき感触に昔のいぶきす

「けた」は変だね。棟木なら「はり」だろう。いぶきとは君、生きている人の呼吸の事だよ。感触に昔の息が聞えるというのはおかしいだろう。感触だけを表現して欲しかった。実際に骨折って作っており、将来のびて行ける。

試験終え心安みて独り行く荒川堤に秋の虫鳴く

雨雲を限る九段の岡の上平たき所小さく人行く

自然をよく見ているとこうした真似の出来ないものが生れる。自然は最良の師である。詠草四十首より人選した五首。歌言葉を説く軽妙な語り口、鋭くて温かい歌評である。

石原純先生

矢 島 祐 利

「アララギ」一九四七年十月号

アララギ五月号に「兄石原純逝く」という歌を出された方があったので、おやそういう方が居られたのかと思った。そうして古いアララギのことなどを思い、先生がアララギを離れないでいて、そうして昔のような分厚なアララギが出ている時代なら、当然追悼号を出す人なんだがなあ、などと取り止めのない感慨にしばし浸ったのであった。すると六月号に斉藤先生の「アララギの初期にかたみにきほひたる石原純もすでに身まかる」という歌が出たので、何かほっとしたような心持がした。

雑誌「科学」が四月号を石原先生の追悼号に当てたのは創刊以来の編集主任として寧ろ当然なことかも知れないが、歌の雑誌では私の目にふれた限りでは「現代短歌」六七合併号に兒山敬一氏の「石原先生の思い出」という一文が出ただけであった（私は歌の雑誌をそう沢山は見えていないから見落しがあるかも知れない）。

赤彦先生の「太虚集」を読んだ人は大正九年石原純君と金華山に遊ぶという歌のあることを知っているであらう。斉藤先生の明治大正短歌史を読まれた人なら、もっと詳しくアララギとの関係を

知っている筈である。石原先生がアララギを離れられたのはもうだいぶ古いことで、実は私がアララギへ入ったのよりも古いことなのだが私はアララギへ入会してからだったか、その前だったか上野の図書館へ行って古いアララギを読み、石原先生の歌も其の他の先輩の歌も読んだ。

尤も、初めて先生の歌を読んだのはそれよりも少し早く、高等学校のとき「鬢日」という歌集が出たのを買って読んだのが最初であった。しかも、これは私がおよそ歌集というものを読んだ最初でもある。大正十一年頃のことと思う。私は物理を志望していたから、此の先輩の名を承知して居り、其の人が歌人であるということも聞いていたから早速買って読んだのである。その歌集の広告が出たのは夏休に家へ帰っていたときで、町の本屋へ行って聞いたなら知らないというので、休みが終って東京へ出て来て買ったのを覚えている。

此の歌集は大震災に焼いてしまつてから手にしないが、句読点を打ったり、三行くらいに書いたりしてあつたが、古雅な言葉が使つてあつたり、とにかく私に未知の世界を啓示して呉れたのであつた。もう一首まとめて覚えているのは始んどないが、静かなうちに感激を湛えたいくつかの情景を思い出すことはできる。アインस्टラインに對面したときの歌や、電子の廻る状を思い見る、というようなのは独特のものであつた。

此の歌集の頃はもうアララギは離れられていたのである。大正一三年頃「日光」という雑誌が出てその同人になられた。私はその頃理科の学生であつたが、気まぐれに一二度その雑誌を買つて読んだことがある。その頃、日光の資金を集めるためであつたのだろう、銀座の資生堂だったかで日光同人の半折や色紙を売っていたことがあつた。そのとき石原先生の字を見た。それは墨に朱や藍を混ぜて書いた異様なものであつた。一様にませたのでなく、筆の穂の各部分へそういう染料をべたべたつけたので書いたとおぼしきもので、どうしてこんな悪趣味なことをやるのかと思つたりした。歌は覚えていない。

其の頃、或はその少し前くらいから口語歌の理論を述べられ、それからその実作をも示されてい

たことは人の知る通りである。こんなことは歴史的事実としては私が言わなくてもほかに適当な方がいくらかもあるであろうし、それよりも前のアララギに居られた頃、左千夫先生の処に出入されたことなどは齊藤先生や土屋先生が直接に知って居られるのであるが私がアララギの歌に注意したのは、全部でないまでも石原先生を機縁とする事が多いので思い出すことを述べたのである。

また私が理科へ入ろうとしていたころ、物理の方では相対性理論が新しかったので、自然と石原先生の著書にも親しんだのであった。言うまでもなく先生は日本で最も早くアインスタインの理論を研究された方であった。紹介と言う点では桑木或雄先生が一番早いのであるが、それは単なる紹介で深く研究されたというのではなかった。

理科大学では昔から十二月二十五日にニュートン祭といって教授学生卒業生の懇親会があるが、大正の終頃の或る年のニュートン祭に何度目かに西洋へ行つて帰つてこられた乙教授の話に、誰だったか向う学者が「石原はどうしているか」と聞くから「彼はロマンチック・ライフをやっている」と答えたら「何だ、君はプライベート・ライフのことを言っているのか」と言つて大いに諭された、呵々大笑されたことがあつた。私は私行上のことをいう気は少しもないけれども、研究を続けられたならば、その方面で吾々を啓発された処が多いのではないかと思う。それにつけても先生が嘗て一度も自分の言いわのようなことを言われなかつたのは男らしいと思う。

私は昭和六年だったか岩波から「科学」とい雑誌が出るとき其の一部の仕事を手伝つてくれないかという依頼を受けた。当時勉強盛りのつもりであつた私はどうしたものか寺田先生に相談したところ、石原君が頼むというのに肘鉄砲を食わずにも及ぶまいというのでお手伝いをする事になった。講演をきいたのは別として、これが先生にお目にかかつた最初であり、それから屢々お会いした。あるとき当時私の勤めていた大学の教室へやつて来られたことがあつたが、それは其の雑誌とは別な先生の仕事を手伝つて呉れないかという話だった。雑誌の用で会う機会はいくらでもあるのに、それとは別な用なのでわざわざ出掛けて来られるというきちようめに恐縮したのであつた。

朝鮮に居る頃、満州へ行く用事が出来そうだから君の処へ寄るといふので、朝鮮の案内でもしよ
うと心待ちにしていたが、その用が出来ないでしまった。それはもう戦争になってからの事であつ
た。その頃、丁度私が東京へ出てきたとき、房州は牛乳があるから保田へ遊びに来ないか、と言わ
れたこともあつたが、それも何かの都合で行かれないかつた。

先生の晩年はお気の毒であつた。軍部からだいぶ圧迫されていた。還暦のお祝いをして慰めてあ
げようという企ても実現できなかつた。朝鮮から帰つて来て、まだお会いしないうちにお悪いこと
をきき、しかも其時はもうお見舞いに行くのさえ遠慮した方がいいのではないかと思われるので、
昭和十八年だつたかに、さきほど言つた房州へ来ないかと言われたときお目にかかつたのが最後に
なつた。

ラザフォードと原子核研究の創始

矢 島 祐 利

「アララギ」一九四八年二月号

原子爆弾の出現に倣って吾々は原子力の恐るべきことをまざまざと見せつけられたのであるが、此の如きは原子物理学から見れば些末な一応用たるに過ぎない。それが利用であるか悪用であるかは別問題として。イーヴ著すところのテザフォード伝を近頃再読する機会を得て、その原子核研究の創始を思い、此の学者も其の研究の流れが此処に到ることは想わなかったであろうとの念を禁ずることが出来なかつた。更に想えば、アインシュタインの、物質は其の質量と一定関係をなすエネルギーを持つとの学説も原子力の問題に一役持つていたのであるが、熱心な平和主義者なる博士も此処に関わりを持つは皮肉である。即ち知る、事實は人の想念を超えて遙かに深刻であることを。原子の学説は古いが、其の核構造の学説は一九一一年ラザフォードの提出したものに始まるのである。思えば僅々三十有余年の後に人は原子力に就いて言ひ且つ恐れねばならなくなった。先づテザフォード其の人について簡単に記すならば、彼、アーネスト・ラザフォードは一八七一年（明治四年）八月三十日ニュー・ジールランドに生れた。彼の祖父の時代にスコットランドから移住したのである。祖父は車輪製造業を営んで居り、其地に移って工場を立てた。彼の父も同じ仕事を続け、

傍ら小農を営み、また当時其地方に建設中の鑄造工事に關係した請負などをしていた。

アーネストは学校の出来もよくて十五のとき五十ギニアの奨学金を貰った。それで其の地方のネルソン・カレッヂへ入った。彼は男六人女五人のきょうだいがあり、第四子二男であった。学校へ行く傍ら農場の手伝い、木を伐ること（彼の父はこれを枕木に売り出していた）、走り使い牛乳搾りなどをした。それからカンタベリー・カレッヂというのへ入り、一八八一年にラテン語、イギリス文学、数学、力学等の学士試験にパスしてバチエラー・オブ・アーツになった。更に理学士（バチエラー・オブ・サイエンス）になる目的で、高周波放電に依る鉄の磁化、という題目を採り、これが最初の研究論文となった。其の頃多くの若い人がそうであつたようにヘルツの電波の発見（一八八八）に心を惹かれ、彼も発信器を作り、学生たちが洞窟と呼んで帽子や外套を掛ける処にしていた地下室で実験を行った。その頃、磁気検波器というのを作り、これで六十フィート離れた処で検波できた。

彼は奨学金に依る学費の不足分を補うため若い学生を教えることをしていた。一八五一年の大博覧会の利益金で有能な学生をイギリス本国へ留学させる奨学資金が設けられていたが、彼はその選に入つた。この嬉しい知らせを彼の母が持つて行つたとき彼は馬鈴薯を掘っていたが、シャベルを投げ出して「薯を掘るのもこれが最後か」と言つた。かくして一八九五年ケムブリッジに行きジェ・ジェ・トムソンの率いるキャヴェンディッシュ研究所へ入った。此処でやはり電波の研究を続け、半哩の距離で受信できるようになつた。これはマルコニの無線通信の研究より前のことである。然し彼は何時までも此の問題にくっついていかなかつた。若しこれに専念していたら電気技術者になつたかも知れないのである。というのは一八九五年にレンチェン（医者の方ではよくレントゲンというが此の方がほんとうに近いらしい）が所謂X線を発見し学界の注意を惹いた。彼も早速此の実験をやつてみた。これは勿論トムソンの指導のもとに行つたのである。彼等はX線に依つて電離した気体の電気伝導に関する研究を行つた（電離というのは電氣的に中性の原子または分子が陰電子を失

うか余分に附着するかに依つて帯電することを云い、斯くして出来た帯電粒子を一般にイオンと言ふ。此の結果は一八九六年リヴァプールに開かれたイギリス學術協会の会合に於てトムソンから発表された。またラザフォードは此の会合に於て彼の磁氣検波器を示し、半哩通信の説明を行った。

斯様にして彼はイオンの研究に入つて行つた。一八九七年には此の方面に急速の進歩を遂げた。例えばトムソンが推測したところの、陽イオンと陰イオンが結合する早さは存立する全体のイオンの数の二乗に比例するであろうという事を事実において証明した。またX線が平行平板の間の空気を電離するときは、電離電流は最初は加える電圧に比例して増加するが、電圧が或る値以上になると最早増加せず飽和電流になることを明らかにした（電離電流というは、二枚の極板の間の氣體が電離しているとき、極板の一方に陽電氣、他方に陰電氣を与えて電圧を加えると、陰イオンは陽極の方へ、陽イオンは陰極の方へ引かれるに依つて此処に電氣の流れを生ずるをいう。）

此の頃フランスに於て放射能の研究が起つて来た。即ち一八九六年ベックレルはウラニウム化合物から黒い紙を透過して写真乾板に感ずる放射線の出ることを発見した。次でシュミットはトリウムにも同様の性質のあることを発見した。やがて（一八九八）キュリー夫妻はラヂウムを発見した。ラザフォードも此の問題に注意し、キャヴェンディッシュ研究所に於てウラニウムに依つて生じたイオンがX線や紫外線に依つて生じたものと同じようにはたらくか否かの実験にとりかかった。さうして其の然ることを知つた。

其の頃彼はカナダの大学に職を得て一八九八年秋赴任した。此処で初めて講義を持ったが、むづかしすぎると言つて学生が抗議を申し出た。研究はウラニウム及びトリウムの放射性の問題をつづけ、放射線に二種の別のあることを明かにした。これをアルファ線及びビーター線と命名した（アルファ、ビーターは申すまでもなくギリシアのアルファベットである）。アルファ線は硬い紙などで遮られるが、ビーター線はそれより百倍も貫徹力のあることも分かつた。ビーター線は磁場を加えると其の道筋が曲がるのに依つて陰電氣を持つことは既にベックレルに依つて示されたのであつ

た。結局これはクルックスが放電管の中に発見した電子と同じものであることが分った。然しアルファ線の方はまだよく分っていないかった。彼はこれを研究して其のエネルギーはビーター線より遙かに大きいことを知った。

其の頃カナダの同じ大学へ赴任して来た若い電気工学者のオーウエンズはラザフォードから問題を貰ってトリウムの研究を始めた。すると妙なものにぶつかつた。即ちトリウムでもなくアルファでもビーターでもないものが出て来た。これはトリウム・エマネーションと名づけられた。ラザフォードはこれを研究してイオンでないことを確かめた。彼はこれを管に導いてそれが夫自身と共に放射能を持って歩くことを知った。此の放射能が弱って行く速さを測り一分毎に半減すること、また此のトリウム・エマネーションはそれと接触したものを放射性にする性質のあることを明らかにした。同じようなことがフランスに於ても起つていた。即ちドルンはラヂウム・エマネーションを発見した。(エマネーションは屢々ドイツ風にエマナチオンとも呼ばれる。これは放射性元素の崩壊過程中に生ずる気体元素である。此の崩壊ということは実はラザフォードの研究に依つて明かにされたのである。また其の気体なることも彼が液体空気を以て凝結させたのに依つて明かにされたのである。)

またアルファ線の磁力に依る湾曲を測り、これがビーターの場合と方向を異にするに依つて陽電気を帯びた粒子であることを確かめた。なおカナダ在任中に放射性に関して重要な多くの研究を発表したが、其の中でも著しいのはラヂウムからアルファ粒子を出してエマネーションになり、これが又アルファを射出してラヂウムAになり、更にラヂウムBに、次にラヂウムCになるという変脱過程を明かにしたことである。それまでは原子は永久不変のものとされていたが、実は不変でなく崩壊して新たなものになり行くことが示された。これに依つて物質観に大きな変革が加えられた。放射能の研究は彼のほかに有名なキュリー其の他多くの人に依つて行われたが、此の原子崩壊説は一九〇二年ラザフォード及びソツデイに依つて発表されたのである。ソツデイはカナダの同じ大学

に彼より後れて赴任して来た化学者で、ラザフォードの共働研究者となった人である。

ラザフォードは一九〇七年イギリス本国のマンチェスター大学へ転任した。此処の方が研究の便宜もよく、大きな成果を挙げた。それはアルファ粒子線を種々の物質に当てて其の散乱の状況を測つてみると極めて稀に射出した方へはね返つて来る事があるのに依つて、物質の原子は其の中心に硬い塊があつて、それが陽電気を帯びていなければならぬと推定した事である。これを原子核と言う。アルファ粒子は目に見えないけれども、水蒸気を以て飽和した容器の中へこれを通すと、其の電離作用に依つて生じたイオンが中心となつて水滴が出来、強い光で照すとアルファ粒子の通つた道筋を写真にとることが出来る。(此の装置はウイルソンの考案したものでウイルソン霧函と呼ばれアルファ線に限らず、X線や其他の放射線、また宇宙線の研究等に広く用いられる。)此のように原子には陽電気を帯びた中心即ち原子核があり、此の陽電気を中和するに足るだけの数の陰電気を帯びた粒子即ち電子が其の周りにあるというラザフォードの原子模型は一九一一年に発表された。

第一次ヨーロッパ大戦中は戦時研究に動員され、ドイツの潜航艇を早く発見するため水中聴音器の研究を主として行つていたが、平和克復後更に原子核の研究を続行し、再び重要な成果を挙げた。それは窒素にアルファ粒子を打ち当てると酸素と水素になるという実験である。これが元素の人工転換の最初の研究であり、近時の原子核物理学の草分けとなつたのである。人工放射能の如きも此の線に沿うての成果であり或る種の元素転換の場合に多量のエネルギーを放出することが原子力の源となるのである。

ラザフォードは一九〇八年にノーベル賞を受け、一九一四年にナイトを貰い、一九三一年にバロンに列せられた。一九一九年には其の師ジェ・ジェ・トムソンの後をついでケンブリッジの教授となつた。壮健であつたが一九三七年或る外科手術の経過悪く、其の師トムソンに先出つて世を去つた。それから後の十年間に原子核の研究は驚くべき結果に到達したがその源泉はラザフォードにあると言つても過言ではない。

五味さんの思いで

矢 島 祐 利

「アララギ」一九五七年十二月号

私は五味さんに会う前から五味さんのことを知っていた。それは雑誌で作品を読んでいたというような単純なものではない。大正十四年秋、麴町のアララギ発行所で赤彦先生の面会日のことであった。訪問者が少なかったのか、あるいは途切れた時だった。先生が私に向って卒業したらどうするのか、とお尋ねになった。私は学校へ勤めるようになると思います、と答えた。すると中学校か、と重ねておききになるので、まあそんな所ですと言った。矢つぎばやに一つきいて見ようかと言われたので、私はお願いしますという返事しかできなかった。

あのころは暢気なもので卒業間際にならなければ就職のことなど話題にならなかった。私は氣象学にも少しは興味を持っていたし、藤原咲平先生の演習でおそらくいい結果が出かかっていたので、そっちの方にも可能性はあったが、氣象の仕事となると辛いから学校の方がいいか、などと薄ぼんやり考えていたに過ぎない。ところが面会日にかよったと言っても一年くらいしか経っていないのに、先生が自分の就職のことまで考えて下さるのかと感動してしまって、あのよう回答するしかなかった。

赤彦書翰一四七四（全集、八卷七五五頁）大正十四年十一月十七日、麴町下六番町廿七より府下寺島町府立第七中学校、安塚千春氏宛に「……五味君より矢島氏就職の事につき御配慮願上候由恐縮の至奉存候履歴書同封いたし置候間可然校長殿へ御進達願上候……」とある。すなわち先生は初めから五味さんに頼むつもりがあつて、たまたまかけるように話されたのであつた。これは先生の知らないことであるが、私の義弟になる男の子が七中で五味保義先生に習つていたのであるが、五味先生は七中をやめて京大国分科の学生になられたのであつた。

その後私は安塚千春先生を訪ね、採用してもらえそうになつた。大学の方から就職につき希望を申出よというお達しがあつたのはそれから後のことである。私は中村清二先生にこれまでの経緯を話した。すると中等教育に特別の関心があるならそうするが良いが、そうでないなら断われ、することはいくらかもあるとの事であつた。私は安塚先生の処へ行つて事情を話し、赤彦先生へは手紙を書いたが先生の病気が進行していたことは当時は知らなかつた。

大正十五年三月二十七日赤彦先生の訃報が伝えられた。私は発行所へかけつけ土屋先生に葬儀に出席したい旨を申出ると行くがよいと言われたので夜行列車に乗り込んだ。葬儀のとき五味さんに初めてお会いできたのである。まるで旧知の人に会う思いであつたが場所柄そう長く話すこともできなかつた。五味さんは京大のLの襟章のついた制服姿であつた。私は卒業に備えて月賦で作つた黒い背広など着ていたので恥かしいような気がした。

葬儀がすんでから先輩たちに従つて下諏訪へ行き桔梗星という旅館で湯を浴み、一同少しく酒を飲んだ。中村美穂という人が用意して来た味醂乾しが配られた。それから東京へ帰る私たちは駅へ向つた。見送りに来られた人たちの中に五味さんもいたのは勿論である。それから五味さんは京都へ帰られたのであろうから暫くお会いする機会がなかつた。

昭和三年八月阿蘇山麓で安居会が開かれたとき、私は出席はしなかつたが、福岡と長崎へ行く用事があつたので、会の終るとき阿蘇で合流するという虫のいい日程にした。安居会が終つて宴会が

始まっている所へ着いたので、あとで土星先生から冷かされた。その晩先生たちの室へ泊めて貰ったのは有難かったが結城哀草果のいびきには閉口した。

それから五味さん青野梓（田中四郎）君にも会い、翌日話しながら山を下り赤水駅から汽車に乗り、熊本で乗り換えた。五味さんは釜山にいる妹の所へ行くと言って下関で別れた。田中四郎君とはそのとき初めて会い、その後会う機会はなかった。

五味さんと度々会うようになったのは昭和四年に新舞鶴の海軍機関学校をやめて上京されてからである。そのころ発行所は四谷から青山南町に変わっていた。その年か翌五年と思うが何かの連絡のはがきの末尾に、例の一刀彫のような文字で「下谷には剣劇はやり青山は萬葉相撲……」というのがあった。はがきは失ってしまつて結句が出て来ない。私は下谷区上野桜木町に住んでいた。土星先生が矢島君の文章は剣劇のようだと言われた由である。五味さんは萬葉集輪講だとか萬葉集年表などの原稿整理で大わらわの状態を想像することができよう。そのころのことは五味さんの第二歌集『島山』の巻末記にも出ています。

昭和六年ごろから私は専門のことも少しは身を入れなくてはなるまいなどと考え、そうすると歌もできなくなり、アララギの仲間たちとも疎遠になってしまった。そういう状態がかなり長く続いた末に、昭和十六年春に京城大学へ赴任し、その年の暮にははつきりと戦争状態に入ってしまった。戦争になつても初めのうちは東京へ出張する機会は度々あったので、時間があれば土屋先生を訪ねたり、五味さんに会うこともあった。

昭和十八年であつたと思う。五味さんは教科書会社の仕事をしておられた。夕方になつたら飯を食いに行こうと言つた。そのころはもう米を持って行かないと料理屋でも飯は出さない、という事態になつていたが、五味さんは大丈夫だといって萬世橋の小料理屋へ入つて行った。馴染みのよう、五味さんも変身したなと感じ、こういう仕事は五味さんには向いていないのではないかという気がしてならなかった。しかしそれは口に出して言うような問題ではなかった。

昭和十九年にはもう出張などできなかつたと思う。そうして二十年の秋には引揚者となり、しかし心は楽しく東京へ帰って来た。その年はまだ諸友との連絡もつかなかつたが、翌二十一年には復刊になった雑誌も貰えるようになった。今私の手許には第三十八巻第一号（廿年九月号）からのアラギが完全に揃っている。当時発行所になっていた奥澤の五味さんの家へも行けるようになった。初めて行ったとき、発行所が焼けたから地方の会員が古い雑誌を送ってくれるので、重複がある。あんたは雑誌をなくしただろうから持って行けと言われた。そこでひと下げ数十冊もらつて来た。これを種子にして古書目録にアラギが出るとなるべく重複を避けながら、だいぶ集めることのできた。復刻版が出ようなどとは想像もしなかつた頃のことである。

引揚げてから私は二年七か月ばかり進駐軍に勤務した。八時に出勤して、ひるは自由に外出して二時ごろ帰つても平気だつたが、あと五時まではいなくてはならない。私の「この日ごろ時間を売りに勤むるとわが言ひしとき友笑ひにき」という歌が雑誌に載っている。五味さんからは手酷い批評を受けたが「時間を売りに勤むる」というのは容易に出来るものでないと言って賞められた類少い例である。私は戦前戦中長い作歌の空白を作つたが、戦後ひまになつて二十一年四月号からとどききを出した。これも五味さんらの励ましのおかげである。

昭和二十二年に石原純先生が亡くなつた。とうにアラギを離れた人とはいへ、かつては輝かしい同人の一人であつたから、アラギで何とも言わないのは良くないと思ひ、「石原純先生」という五枚ばかりの一文を書いて五味さんへ渡した。土屋先生がこれでよいと言われたそうで、巻末の六号記事ではあるが十月号に載っている。その後専門のことでもよいから何か書けと言われ、「ラザーフォードの原子核研究の創始」というのを二十三年二月号へ書いたことがある。

昭和二十三年の後半から新制大学の仕事に関係するようになって、また忙しくなり歌の方は第二の大休止の時期に入ることになる。ただ一つ思ひ出すことがある。私も関係した『明治文化史』という仕事の一環として『明治文化史論集』が昭和二十七年に出版された。その中の論文の一つに「新

興明治歌壇史の考證―根岸短歌誕生前の経緯（桂泰蔵）という珍しい研究があつて、桂湖村のことも出ていたので五味さんに知らせたところ、早速理科大学の私の所へ来られたのでこの本を用立てた。いくら役立ったかどうか、結果は聞くことができなかった。

それから時が流れて、私立だからかなり遅いのであるが定年退職になつて、少しひまになり三年ばかり前からまたいくらか歌ができるようになった。しかし五味さんは病気になつてしまつた。訪ねてみようと何度思つたか知れない。しかし病気になつた人に会うのがつらくて遂に訪問をしなかつた。代筆の年賀状は何度かいたのだが、いつだつたか返事が出せないから年賀状はもう呉れるなという印刷の葉書がきたのには愕然としてしまつた。それでもその翌年の正月には年賀の代りに「返しぶみ求むにあらず吾はただ碌々とし在りと告げなむ」と書いたつもりで投函してから「碌々」を「録々」と書きはしなかつたか、五味さんに笑われるだろうと思つたが、訂正の葉書を出して人手をわずらわす程のことでもないから止めた。前に出した葉書はあれだけでは侘しいので近況報告のつもりで「雨降りて寒きひと日をこもり居てペルシアのふみを読まむと思う」と書いた。これは一般の人には嫌味に聞えるだろうから雑誌には出せない。（五月三十日、葬儀の翌日記す）